ひといき

論語を英語で読んでみようー1

大阪大学名誉教授　長谷川　晃

はじめに

私は30年近く前から毎月、満月の日に、京都のロシア料理店の加藤オーナーのご招待で「月読み会」という会を持っている。この会で「老子－81」章を原文、和文、それに英訳で読み上げた。「老子」の後、同年代、紀元前五世紀の「論語」を、老子と同様、英訳を使って読んでいる。老子の道徳教は老子自身が書き残したものとされているが、孔子の論語は孔子の弟子たちが主に孔子の言葉として書き残したものである。

老子と孔子の思想は対照的で、中国思想の二つの大きな流れの根源をなすものである。老子が長江より南の農耕文明を代表する哲学者であるのに対し、孔子は長江以北の漢民族の思想を表すものである。老子は母性社会を根源とする考え方を代表するのに対し、孔子は父性社会を基盤とする思想の持ち主である。老子は人間に関しては、その内面を重視し、人間社会の秩序より、人と自然の繋がりを大事にするのに対し、孔子は人間社会の秩序に重きを置く。日本社会に深く浸透している「本音と建前」の二重構造は日本人に深く影響を与えた老子と孔子の思想で代表されると見ることができる。つまり、日本人の本音は母性思想で「老子」建前は父性思想で「孔子」と言うことができる。例えば、老子は18章で、大道廃（すた）れて、仁義有り。慧知出て、大偽有り。六親和せずして孝子有り。国家昏亂して忠臣あり。と言って孔子が重んじる「仁」、や「義」、「慧知（えいち）」、「孝」や「忠」を批判する。つまり、老子に言わすれば、孔子が大事にする仁や義は大道が廃れたから必要になるもので、もし人間が自然の「道」にそぐわない生活をしておれば、仁も義も本来不要なものだと言う。また、孔子が大事にする「孝」が必要になるのは親子、兄弟が争うからであり、親子、兄弟が本来の人間らしさを持って居れば、孝などと言う言葉は不要なものであると。同様に、国家が混迷するようなことが起こるから「忠臣」が必要になるのだと。さらに、「慧知出て、大偽有り」では頭でっかちな人間が出てくると世の中、嘘っぱちになると言って、つまらない知識を否定する。さらに、19章では聖を絶ち智を棄つれば、民の利百倍せん。仁を絶ち義を棄つれば、民は孝慈に復せん。功を絶ち利を棄つれば、盗賊有ること無けん、と言って、聖や智を不要なものとし、仁や、義などは捨てたほうがいいと言う。

こうした老子の批判は、それ自体大変面白いが、一歩退いて考えてみれば、立場の違いから来ているとも思われる。我が国で、縄文時代から弥生時代にかけて、世の中が採取生活から農耕生活に変革してきた時、自然と組織社会が生まれ、国家が誕生し、秩序が重んじられるようになった。この時、新しい人間社会の秩序が重要になってきたのと同様、中国でも孔子の生きた頃の戦国時代における組織人間社会では孔子の考えが必要となってきたと思われる。同時代の老子は、こうした新しい人間社会に見切りをつけ隠遁生活に入り、バカどもがと、呟いていたのだろう。どちらも人間らしい生き方と言えよう。論語を読む場合、こうした社会情勢の背景を考えて読んでいく必要があろう。英語で論語を読んでいくと、老子の場合より、実学的な解釈ができるメリットがある。

例えば、論語の各所で出てくる「君子」と言う言葉をとってみよう。読者は君子を英語でどう訳しているかを考えてみたことがあるだろうか？まず、君子は君主ではない。文字も発音も似ているので間違う人が多い。国語辞典を見ると、君子とは 学識・人格ともに優れ，徳行のそなわった人。とある。君子の英訳はgentlemanだ。和英辞典でもそう書いてある。しかし、多くの日本人に君子はgentlemanだと言うと、驚かれる。その理由の一つはgentlemanの和訳は「紳士」と思ってる人が多いからだろう。ために論語の「君子」を「紳士」に置き換えると違和感を持つ人は多かろう。論語には現在も日本で使われている漢語が多く、返ってその意味を間違って解釈することがある。2500年の間には当然漢字そのものの意味が変化しているし、また論語が日本に入って来て以来の1500年近い間にも、使われている漢語の意味が少しずつ変化して来ている。つまり、日本ではなまじっか漢字を使っているために、それを現代風に解釈すると危険ということも多い。論語を英語で読むというのは、こうした危険をある程度排除できる利点がある。

老子を英語で読んだときには全章を一冊の本にまとめ、Kindle Bookとして出版した。ボリューム的にも内容的にもこれは可能で、また、意味のあることであったが、論語は、いわば、玉石混合で、内容も遥かに豊富で、全てを英語で紹介することの意味は少ないと思われる。現に月読み会で毎月論語一から英語で読み始めて、すでに10年近くなるが、まだ全体の７割程度しか読み切れてない。今回、テクノネットで英語で読む論語として紹介するの

は全文の紹介ではなく、よく世間で引用されている章を抜粋して紹介することにする。読者にもこの方が論語を引用するときに役立つと思われる。

中国の古典には幾つか重要なものがあり、学生時代に漢文の授業で習ったものも多い。漢文を読む場合、これを現代文に直す読み方と、原文になるべく忠実に返点などを打って読む方法がある。後者は古典的な読み方だが、若い人たちにはあまり馴染み深くないかもしれない。

日本でも、縄文文化と後の弥生文化の違いがあるように、中国でも大きく分けて漢民族が代表する北方民族と稲作に馴染む南方民族の文化の違いがある。老子は南方民族出身で、その考え方は縄文日本によく似て母性文化をベースにしている。一方論語で引用されている孔子は漢民族の代表的な考えの持ち主で、父性文化を代表する。その考えは後に日本でも紹介され、日本人の「形」を作るのに使われるようになった。大変面白いことに老子も孔子もほぼ同時代、紀元前五世紀の人だが、この二人、主張する内容は全く正反対である。

論語を全部読んでみると、その９割ほどは知っていてもあまり意味のないものであることに気づく。しかし、後の１割ほどは、日本でもよく耳にするものや、なるほどと感銘を受けるものがある。今回テクノネットでシリーズとして紹介する論語は後者の抜粋である。ここでは論語の原文を源氏物語の翻訳者として有名はArthur Waley氏の英訳Arthur Waley in “Analects of CONFUSIUS” Random House, New York, NY 1938、を使わせてもらって読むことにする。余談だが、Waley氏の顔写真とプロフィルは京都寺町丸太町通上がるの廬山寺に展示してある。Waley氏が廬山寺ゆかりの源氏物語を翻訳したことを記念してのことだろう。

論語の日本語版は巻第一から第十までを更に二つづつに分け、各章に巻頭に出て来る人名などをつけて、例えば、巻第一の中を学而第一、為政第二とし、全体を二十のセクションに分けて読む場合が多いようだ。しかし、Waley氏の英訳では巻第一から第十の分類しかしていない。ここで論語の抜粋を紹介する場合には従来の日本流の方法で章の名前を出すことにする。

まず、巻第一学而第一から始めよう。

学而第一－１

子曰、学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦楽乎、人不知而不慍、不亦君子乎。

Interpretation by Arthur Waley:

The Master said, To learn and at due times to repeat what one has learnt, is that not after all a pleasure? That friends should come to one from afar, is this not after all delightful? To remain unsoured even though one's merits are unrecognized by others, is that not after all what is expected of a gentleman?

論語の最初に出てくるこの節は「有朋自遠方来、不亦楽乎」つまり、朋（とも）」あり遠方より来たる、また楽しからずや」としてよく引用される句を含んでるため比較的なじみ深い文である。論語は弟子が孔子の言葉を書き留めて紹介している箇所がほとんどだが、こうした場合、子曰、つまり、子（し）曰わく、で始まる。ちなみにこの英訳はThe Master saidである。つづく、学而時習之の英訳はTo learn and at due times to repeat what one has learntとしている。つまり、学び、そして、学んだことを、後に適当な時に、(at due time)、反復する、これまた楽しからずや、a pleasure, と。論語では説をよろこぶと読ます場合が多いし、英訳もそのまま、pleasureである。日本語では「而」は「しこうして」とよむが、英語ではat the same timeで具体的でわかりやすい。最後の「人不知而不慍」は「人知らずしていきどおらず」と読む。この部分の英訳はTo remain unsoured even though one's merits are unrecognized by others でわかりやすい。憤らずは「いきどおらず」と現代文では読ますが、英訳を見るとunsoreとしていてこの方が適訳だろう。soreはヒリヒリ痛むなどの時に使われる語で、unsoreはその反語である。remain unsoredとは平静にしていると解釈すべきで、どんな時に平静にしているかと言えば、自ずからの功績や美点（merit）が人に認められないような時にも、だ。これは和訳の人知らずして慍（いきどお）らずと随分印象が違う。英訳を方をよしとすべきだろう。これが君子たるべき姿だと。時習之はto repeat what one has learntである。習うという単語は何かをならうというように使われるが、英訳であるように習ったことを復習することである。at the due timeは適当な時、あるいは時々を意味する。不亦説乎は日本語訳はまたよろこばしからずや、である。説をよろこぶと読ませる場合が多い。英語ではpleasureを当てているのでこの読み方は当たっている。

有朋自遠方来は文字通りThat friends should come to one from afar、つまり、遠方からやってきた友達（複数）、やってきた相手は人、oneであり、不特定多数を指す、不亦楽乎は文字通りis this not after all delightful？と訳している、after allは結果として、結局はという意味を持つ。ここまではよく聞く言葉でわかりやすい。続く人不知而不慍はTo remain unsoured even though one's merits are unrecognized by others, と訳されている。この訳は含蓄があり少し難しい。人不知は文字通りでは「人が知らない」であるが、続く不慍は話読みでは「いきどうらず」と読ませるが、意味は気にかけないという方が合っている。英語のunsouredはsoureつまり、sour（酸っぱい）の動詞、酸っぱい思いをするの否定文で、まさに気にかけないという意味だ。結果この文は「人が知らないことがあっても気にかけない」という意味だが、英訳はこれを「さらにその人の美点が他人に認識されなくても」と解説的に訳している。最後の不亦君子乎は、また君子ならずや、とよむ

が、君子の英訳はgentlemanであることに注意したい。日本語訳ではgentlemanは紳士だが、今は使われなくなっている君子より紳士の方が分かりやすい。論語には君子なんとかという文がしょっちゅう出てきて日本語訳はそのまま君子（くんし）と読ませる。しかし、これは、わかったようでわからない言葉だ、一方、gentlemanという英訳を見てなーんだと思う人が多かろう。

いかがであろう。論語を和文で読むと耳障りがよく、綺麗に聞こえるが、実は君子の例の通り、意味を曖昧にしか理解しながら読んではいないだろうか？この例で英語で読むという意味がご理解いただけたと思う。続いて次の抜粋に移ろう。

学而一－３

子曰、巧言令色、鮮矣仁。

Interpretation by Arthur Waley:

The Master said, 'Clever talk and a pretentious manner' are seldom found in the Good.

この文も「子の曰わく」から始まる。巧言は巧みな言葉、英訳はclever talkである。また令色は愛想笑いとでも言おうか、色は顔に出す表情である。英語はpretentious mannerとうまく訳している。pretentiousは、動詞pretendから来ている形容詞で、ふりをする、つまり、見かけ倒しの礼儀だ。そして鮮矣仁（すくなし仁）の「鮮」は滅多にない、数少ないという意味だ。大事なのは「仁」の訳だが、Waleyは大文字のGを使ってGoodと訳している。goodの固有名詞にしている。仁の適当な英単語がないからだろう。仁は人偏に二と書くことから、元々人が二人いる時にお互いに思いやることを意味する語である。
次に移ろう。

学而一－４

曾子曰、吾日三省吾身。為人謀而不忠乎。与朋友交而不信乎。伝不習乎。

Interpretation by Arthur Waley:

The Master Tseng said, Every day I examine myself on these three points: in acting on behalf of others, have I always been loyal to their interests? In intercourse with my friends, have I always been true to my word? Have I failed to repeat the precepts that have been handed down to me?

論語は「子曰」で始まる文が多いが、時にはこの例のように孔子の弟子の言葉が引用されることもある。この文もその例で、弟子の曾子の言葉の引用である。曾子が言うには、おそらく孔子に言ってるのだろうが、私は３つの点について自己反省、examin myself, をしている。その３点とは、１．為人謀而不忠乎、他人のことを慮（おもんばか）って忠はないか？為人謀はin acting on behalf of othersと訳している。「謀る」はよく企てると言う意味に使われるが、英訳は他人のために行動するとなっている。忠は文字通り英語でloyalでこれも孔子の好きな言葉でよく使われる。２．与朋友交而不信乎、朋と交わって不信なことはないか、不信乎はtruc to my word、つまり言葉に偽りないか、だ。そして、最後の、３．伝不習乎はHave I failed to repeat the precepts that have been handed down to meと訳している。現代語では習ってないことを伝えてないか？となるが、英訳はさらに深く、私に引き継がれた（hannded down）precept, 原理原則を間違いなく伝授しているか、としている。preceptはユダヤキリスト教で使われ、たとへば十戒のことをthe ten preceptsと言う。古典を伝授する場合には自分の勝手な解釈を入れてはいないかと言うことはいかにも論語らしい教えである。しかし、これではinnovationは生まれない。

学而一－５

子曰、道千乗之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時。

Interpretation by Arthur Waley:

I-5 The Master said, A country of a thousand war-chariots cannot be administered unless the ruler attends strictly to business, punctually observes his promises, is economical in expenditure, shows affection towards his subjects in general, and uses the labour of the peasantry only at the proper times of year.

道千乗之國で始まるこの文は封建時代のリーダに対する教訓だが、今の指導者にも役立つ話だ。千乗之國とは英訳の通り千騎の馬車隊を有する大軍をいう。今であれば部長さんや社長さんへの心得であろう。その心得とは敬事而信、節用而愛人、使民以時、つまり、英訳attends strictly to business, punctually observes his promises, is economical in expenditure, shows affection towards his subjects in general, and uses the labour of the peasantry only at the proper times of year. にあるように、厳密に業務にあたり、自ずからの約束事を時間通りに守り、経費の出費はできるだけ節約し、部下には常に愛情をもって接し（愛人は人を愛す）、百姓を徴用するときには農閑期を選べと教訓している。最後の文は現在の部長や社長には関係ないようだが、広く解釈すれば、部下に仕事を命じる場合には部下の仕事の都合を考えろと言う意味に解釈すれば良いだろう。

学而一－11

子曰、父在観其志、父没観其行、三年無改於父之道、可謂孝矣。

Interpretation by Arthur Waley:

The Master said, While a man's father is alive, you can see only his intentions; it is when his father dies, that you discover whether or not he is capable of carrying them out. If for the whole three years of mourning he manages to carry on the household as his father's day, then he is a good son, indeed.

この文は孔子らしく、父と子の関係を戒める文章で、いかにも父系社会哲学の代用者としての言葉である。日本では親孝行はどちらかといえば、母親に対する孝行を言う場合が多いが、漢民族では親といえば父親を指す。父在観其志は父が生存中はその志を見る、という意味だが、Waley氏はさらに突っ込んで父が生存中はその表面的な志ししか見えないがと訳している。そして父の死後、その行いを観る、となっているが、Waley氏は父の死後初めてその志を（息子が）全うしたかどうかを見出すと意味深く読んでいる。そして父の死後３年間の間に父と同じように生活を送ることができれば、その息子は真の親孝行者と言える。ちなみに親孝行のことは英語でfilial pietyという。この言葉は英国にもちゃんと存在する。

学而－－14

子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、就有道而正焉、可謂好學也已矣。

Interpretation by Arthur Waley:

I-14 The Master said, A gentleman who never goes on eating till he is sated, who does not demand comfort in his home, who is diligent in business and cautious in his speech, who associate with those that possess the Way and thereby corrects his own faults－such a one may indeed be said to have a taste of learning.

Note; sated with; 欲求などを固く満たすこと。

この文も孔子が君子はあるべきだと言っている例である。食無求飽は飽きるほど食を求めてはいけない、という意味だが、「飽きるほど」英訳はtill he is satedとしている。sateは欲望をみなすことを言う。居無求安も同様、求めるべきでないの言葉が使われ、今度は居についてである。つまり自宅での安楽を求めてるべきでないと、敏於事而慎於言はdiligent in business and cautious in his speechと訳し、事、ビジネスに於いては言葉に注意すると訳している、慎はつつしむと読むが、この方が適訳と思われるが、慎むの良い英語がないのかもしれない。漢語の慎むは注意深くすることを意味するのかもしれない。就有道而正はassociate with those that possess the Way and thereby corrects his own faultsとしているが、この文を和読みすると有道に就いてそして正すとなり、意味が曖昧になる。英訳では道を極めた者と付き合い、自ずからの欠陥を修正すると言う意味でわかりやすい。そして最後に可謂好學也已矣は、such a one may indeed be said to have a taste of learning. と訳し、そのような人間は真に学を好む者だ（可謂好學）と訳している。

学而－－16

子曰、不患人之不己知．患不知人也。

Interpretation by Arthur Waley

I-16 The Master said, (the Good man) does not grieve that other people do not recognize his merits. His only anxiety is lest he should fail to recognize theirs.

この号で引用する学而の最終節である。これも子曰で始まる。不患人之不己知は人、つまり他人が己を知らないことを憂うべきでない、患不知人也、つまり人を知らないことを憂うべきだ、と言う文でわかりやすく、覚えておくのにいい。英訳はdoes not grieve that other people do not recognize his meritsと更に具体性を持たせ、己の美点を知らないことをとしている、同時に、君子はと主語注釈をつけている。学者でもよく、自分はこれほどいい仕事をして論文発表をしているのに学会でちゃんと認めてくれないことを嘆くより、他人の仕事をちゃんと評価しないことを嘆きなさい、と言うことになる。耳の痛い方が多いのではないか？

終わりに

以上で論語を英語で読むシリーズの第一回を終わる。元の漢文をなまじっか和読みするよりは英訳の方が曖昧性が排除できてわかりやすいことがご理解いただけただろうか？

（通信　昭和32年卒　34年修士）